練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第９回）「心の教育の推進」部会　要点録

開催日時		平成21年12月１日(火)　午後４時00分～午後６時30分
会　　場		練馬区役所本庁舎11階　1102会議室
出席者	委　員	生越詔二、石原正義、佐藤宏、久能正吾、一ノ瀬秀治、山崎高志 濱元雅俊、相田真人、小林昭文、(敬称略)
	その他	教育出版
	事務局	栗原健　指導主事

１ 挨拶

アドバイザー

今朝の朝日新聞に文部科学省の問行調査の結果がトップに出ていた。まさに心の問題やコミュニケーション不足のことが書かれていた。

子供の育ちの中に社会性を身に付ける機会、学校に通うようになる前、あるいは地域の中でのコミュニケーション不足というのが人格形成に大きく影響している。そういう意味でも、ここでの検討、議論を聞くと、そうしたものに焦点を当てることが自明の理になっている気がして、心強い感じがした。まとめの方向ということで大いに期待したい。

２　協議

委員

本日の協議、作成資料の内容検討についてお願いしたい。

委員

原稿に対してご意見をいただいたところに赤を入れたものが１つ目番。それを直したのが２つ目番。２つ目番はあとでご覧いただければと思う。

赤を入れた部分、入れた方にどういう意図で入れたのかを説明していただきたい。

１番（１）の基本的な考え方というところでは、「揺るがす」というのは良い意味にでも悪い意味にでもとらえられると書いてあったので、「揺さぶる」にした。

「着実」にも赤が入っていたが、これはどういうことか私もわからなかったので「確実」、またはとってしまったほうがいいのではと思った。

「段差」というのが意味不明という指摘があった。ただ基本方針のほうに段差となっていて、（学習内容や指導方法の違い）という補足が入っていたので、それを入れた。

「密接な学校づくり」というのがクエスチョンになっていたので、「連携した学校をつくることで」と入れてみた。

「もつ」は、以前こういうときの「もつ」はひらくと教わったので全部ひらいたが、色々調べてみたら漢字になっているので全部漢字に変えてみた。このへんは指導主事の先生にもアドバイスをいただきたい。

効果５の「子供の心を理解していくことが可能となる」に線が引かれていたので、このへんは検討していかなければと思う。

「子供の心理的・生理的成長は、小学校５年生ごろから転換期を迎え」ということで、これは間違いなく基本方針の中のデータにもあり、保健給食課の健康診断の資料にも確かに載っている。以前と比べて１年間分くらい前に成長が早まっている。ただ「自尊感情の低下が急速に進む」というのは実はそこからはわからない。これは少し変えなければいけないと思う。

不登校生徒が多くなるとか、色々な心の問題が出てくるというのは確かなことだが、ここから自尊感情の低下というのはちょっと読めなかったので、ここの文章は少し変えさせていただく。

（1）基本的な考え方のところを読ませていただく。

「練馬区立小中一貫教育校設置に関する基本方針　保健給食課『学校保健定期健康診断』」によると、子供の心理的・生理的成長は、小学校５年生ごろから転換期を迎え、自尊感情の低下が急速に進むことが確認されている。

また、小学校５・６年生と中学校１・２年生において、不登校児童・生徒数が増える傾向にある。特に小学校から中学校へ進学するにあたっては、不登校生徒が倍増する。「『児童・生徒の問題行動等の実態について（平成 18～20 年度）』―東京都教育庁」。

現在の子供たちの状況を見ると、人としてよりよい生き方をしていくために必要な社会体験や生活体験などの体験活動が不足している。そのために、「豊かな心」が十分にはぐくまれていないことが指摘されている。

このような子供の変化の中にあって、これまでの小・中学校では、それぞれ６年間、３年間の自己完結型の教育に終始しがちであったため、上記の課題に対して適切に対応してきたとは言い難かった。

教職員がこうした課題を認識し、９年間を見通して子供を育てていくことは、「豊かな心」をはぐくんでいく上で効果的であると考える。特に、異年齢集団による活動や体験的な学習は、子供の心を揺さぶる機会を多く作り出せる。心は心によって耕すことができる。小中一貫教育、さらには小中連携教育によって子供に豊かな心を確実に身に付けさせていきたい。

なお、「豊かな心」を小中一貫教育ではぐくむにあたっては、以下の効果が期待される。

効果１　９年間にわたる学校生活を通して、異年齢集団による活動や体験的な学習を行うことにより、多様な生き方が指導できる。

効果２　９年間を見通したカリキュラムを編成・実施することにより、発達段階に応じた計画的・継続的な指導が可能となり、「豊かな心」の育成に結びつけられる。

効果３　小学校から中学校へ進学する際の段差（学習内容や指導方法の違い）を緩やかにし、円滑な移行を図る。その結果、子供たちが安定した学校生活を送れるようになり、不登校や問題行動の減少を図ることができる。

効果４　地域社会と連携した学校をつくることで、地域に根ざし、地域社会での連帯感を持った子供が育成できる。

効果５　小学校・中学校の教職員が共通理解を図り、協力していくことで、子供の心を理解していくことが可能となる。

アドバイザー

教育庁の調べによると、「不登校生徒が倍増する」というのは都内全体で二倍という意味だろ

うか。

委員

都内の６年生の不登校児童と、中１の不登校生徒の数の比較である。

アドバイザー

実際に、新聞報道では中１ギャップについては相当の数を出している。これは全国の数値だから、東京都は違うのでそこを確認したかった。およそ何倍、とか、何年度調査においてはと。根拠になるものを示したほうがいいと思う。

もう一つ、保健給食課の健康診断から心理的・生理的な成長のことがはっきり数値でもわかる。しかし、自尊感情の低下はここからわかるはずがないと思った。

自尊感情以外の何がわかっているかが知りたい。その報告書の中に何か記述があれば、まとめとしてこうだみたいな。そうすると、そこからこのことが指摘されている、あるいは確認されたという文章が成り立つ。これは公のものだから、データの根拠がはっきりしないと「あいまいな認識」という指摘に対して抗しきれないと困る。

委員

特に心理的というのは、はっきりそこまではわからないと思う。心理的・身体的成長が以前に比べて１年間分早まっている、というような記述しかできないと思う。

アドバイザー

こういうふうに根拠を示して出している文章だから、確実に言えることしか出せないだろうというのは考え方だが。そうでなかったら、うんとあいまいにして、スキャモンの発育曲線みたいなイメージであれば「より一層急激な成長が……」という表現も一般論だから可能だと思う。

その次の段の「このような子供の変化の中にあって……」の最後のところ、「上記の課題に対して適切に対応してきたとは言い難かった」この表現でいいかどうか。この文章だと、それぞれの学校種別で完成させようという意識が強いのだと思う。

自己完結型の教育であるがために、子供の成長に適時適切に合わせた指導がどうしても不足しがちであった、あるいは適切に対応はそれぞれしているはずだが、結果的に「児童・生徒の成長に果たして寄与してきたのかどうか。有効に効果的に機能してきたのかどうか」という記述のほうが、流れとしてはいいのかなという気がした。

それから体験のことが前段に出てきて、それを核に、迫るにはどうしたかという論。
本区の答申の中には山場として心の教育が必要であるということとの関係も少し付け足したい。

いろいろな状況がある中で、特段に心の成長という意味で言うと、直接体験、間接体験を含めた体験そのものの持つ意味が心の成長に非常にかかわっているのだという、それ以外のものも少し触れておいたほうが、論としては厚みが出てくる気がする。

部長

要は「小中間の連携が不足していた」というような言い方に変えればいいという感じがする。

それぞれではそれなりに対応しているけれども、例えば、そういう色々な情報がきてなかったり、あるいは保護者とかそういう関係がしっかり把握できていなかったとかということも含めて、連携がなかなかとれていなかったことを少し入れてもいいという感じがした。

アドバイザー

そうすると、次の段が生きるようになる。こうした課題意識を先生が持つことが、実は大変重要なのだと。連携についての方向性がはっきり見える表記になっているので、流れとしてはいいと思う。

委員

（2）本部会の検討の視点のほうに話を進めたい。

①心の教育の進め方

心の育成は、道徳の時間だけで行われるものではない。道徳の時間を中心に各教科、特別活動、総合的な学習の時間等を関連付けることで、補充・深化・統合していくことができる。特に、小中一貫教育においては、より幅の広い異年齢集団での交流や体験的な学習が可能となる。それらの活動を通して、「豊かな心」をはぐくんでいきたい。

また、心の教育は、学校教育だけで行われるものではない。子供の心の育成に家庭が果たす役割は大きい。学校と家庭がいかに連携していくかが、心の育成を充実したものにできるかどうかのカギとなる。そして、本来子供の心をはぐくむにあたって地域が果たす役割も大きかったはずだが、近年、その役割が希薄化してきた。つまり以前のように、地域社会で子供を育てていこうという風潮は薄くなってきている。しかし、地域には子供の心をはぐくむ機会がたくさんある。例えば、練馬区は都市化の中にあって、住民同士のつながりを強く持っていこうとしている。数々の祭り、地区祭、学校を中心とした避難拠点の設置等は、住民同士を強く結び付けている。練馬区では区教育委員会教育長からの諮問を受けて、「練馬区地域教育力・体験活動推進協議会」が「未来へ！　ふるさとねりま～共に育つ『要（い）場所づくり』のすすめ～」を答申している。これらを参考に今後、学校と地域の連携を一層強め、心の教育を推進していければと考える。

次の図は、心の教育の進め方を表したものである。

Ⅰ期（１学年～４学年）……具体的な物を通して考える時期。
Ⅱ期（５学年～７学年）……論理的・抽象的思考へ移行する時期。
Ⅲ期（８学年、９学年）……論理的・抽象的思考を着実に行う時期。
図の中は省略する。

部長

「異年齢集団で」というのは小中一貫になるから、小学校とか中学校単体よりも「より幅の広い」という意味でそれを入れた。

アドバイザー

「役割が希薄化して」いるという表記の仕方がどうもピンとこない。人間関係が密度の濃い

綿密なかかわり合いから機能が弱まってきた、役割が十分果たせない状況になったということだと思う。児童・生徒の問題行動で、突然カッとなってパッといきなりやるというような育ちの閉塞感。子供の数が家庭の中で少ない、大事に育てられて、体験の不足、かかわるという事柄がほとんど日常的にできない状況。地域社会そのものもそうした方向性の中にある。

それからもう一つ、区でも色々な施策を行っている中の一つ、「祭り、地区祭、学校を中心とした避難拠点の設置」。祭り、地区祭はよくわかるが、「避難拠点の設置」というのは住民同士を強く結び付けているのかどうか。結び付きを強くするには何か強くする触媒になるような訓練等の働きが書いてないとストレートに入ってこない。ここは少し表記を工夫したほうがいいと思う。

それから、文章の飾り。家庭の持つ教育機能、地域社会の持つ心をはぐくむ上での教育機能。両方とも非常に重要な役割機能を持っている。具体的には家庭ではこうだ、地域ではこうだというほうが、論理としては明快になり流れとしてはすんなりくる。

委員

一番上の右端のところから「道徳の時間を中心に」で、２行目の端「補充・深化・統合していくができる」という。この文章からだと、何を補充・深化・統合していくのか。

委員

一つは、道徳の時間だけでやっていくものではないということ。いろいろなもので補充、付け足して、深まっていくだろうし、またそれが統合していくだろうということで書いた。

アドバイザー

これでも意味が通じると思う。道徳の総合的な学習の時間等、ここではすべての教育活動を通して行われている道徳教育との関連をという意味。それを補充・深化というのが道徳の時間の目標ということで書いてある。役割でもあるけれども、その文言が入ると意味が通じるかなという気がする。

委員

一ノ瀬先生がこれを書くにあたって小学校を出て、中１ギャップが起きる一番の問題点は何をイメージして書かれたか。

委員

やはり小学校と中学校の指導、先生の言葉一つにしろ、色々な面で違いすぎる。あとは制度的なもの、一人の先生がずっと教えて、それが急に今度は多くの先生で教える。生徒が期待されるのもある。中学校になったら少し大人になったとか、そこでプレッシャーを感じるとか。色々なものが複合的にあるが、直接の原因というのは言えない。

部長

最近、都のホームページか何かに載っていた資料で、意外と勉強のことがすごく大きい。友人関係はもっとあると思ったが、結局入ってみたら結構それなりに子供はやっていく。けれど、

勉強に対する不安がすごくあるという感じがした。

委員

入って３カ月たったあとの調査というので、うろ覚えだが「定期テストが初めてだから、それに対してものすごく不安だ」というのがあった。

アドバイザー

私が「小中６年、３年で適切に対応してきたとは言い難かった」という文言を先ほど言ったのは、中１ギャップの要素を含めたほうがいいと思ったから。一言でいえば、連続して成長していく子供たちが不適応を起こすということ。システムが変わって、勉強も人間関係も含めて、自分自身の成長も変わる。そうした事柄が自己の中でうまく統一、整合性がとれなくなってくる。それは気持ちの問題ももちろんあるけれど、そうした事柄が起こるのは今のまさに自己完結型、連携がなかったからということが、この部会が発足する考え方が出された背景にあると思う。

委員

私たちが出さなければいけない答申というのは、あくまで教員の指導マニュアルのようなものだと思う。地域の力とか家庭の力はとても大きな問題だと思うけれども、やはり一番グサッとやらなければいけないところは、私たちの指導のあり方ではないか。

目的意識と方法論みたいなものが１年から９年全部を見通して、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期、どの期を扱う教員も統一されていることが、とても重要なことだろうと思う。そのためのプログラムをつくることが、豊かな心をはぐくむことになっていく。

委員

私は家庭教育と地域の関係と学校は関係ないとは絶対に思わない。学校が働きかけなければ、家庭・地域からどんどんやってくるわけじゃない。そういう意味では、学校のまず内部を固めるという考え方も大事かもしれないが、もっと、今まで我々が家庭に働きかけてきたもの、ないもの。例えば、我々が地域の何かに参加しているのか、いないか。

アドバイザー

今の先生の議論はつまり学校教育が中心ではないかということ。教員は何を共通認識しながら、与えられた役割を十分果たしていくかをイメージしたのだと。

この図柄は学校、家庭、地域との間に２本でジャンクションのようにつながっていると、ちょっと弱々しい。一番強調したいことは何かが、この図がわかるように進め方、相互関係、つながりを示す。先程の「学校の先生は何をしたらいいか」という議論にもつながるが、道徳教育は全面主義だということを意識づけるためにも、一体として行うのだと。

子供の成長、心のある部分、思考の問題を中心として、道徳の時間だけでなく「すべての教育活動を通して、全教育活動を通してこれはやっている」と念を押してもいいと思う。

委員

②豊かな心の内容

本部会では「豊かな心の育成」を小中一貫教育・小中連携教育においてどのように進めていくかについて検討してきた。まず、本部会は「豊かな心」を次のように捉えた。

「豊かな心」とは、人としてよりよい生き方を求め、それを実践していこうとする心である。よりよい生き方とは、社会人の一人として健全に生活していこうとする心、生命を尊重する心、自信を持って生きる心、他人を思いやる心などを持ちながら生きていくことである。

「豊かな心」の内容は、実に広くて深い。例えば、「主として自分自身に関すること」の中には「自尊感情」、「基本的な生活習慣」、「節度・節制」、「強い意志」「不撓不屈」、「誠実・責任感」、「理想の現実」、「真理愛」、「個性の伸長」等がある。いずれも人間の成長において欠くことができないものばかりであるが、本部会では「自尊感情」を重点項目に据え、その他の項目についても適宜指導していくこととした。

重点項目を選定するに当たっては、特に現代社会および子供たちに欠けてきて課題になっている項目、よりよい社会の実現・よりよい生き方をしていく上で絶対に欠かせない項目、社会の変化によって重視されてきた項目を選ぶこととした。その結果、次の５項目を重点的に取り扱うこととした。

１．主として自分自身に関すること……自尊感情
２．主として他の人とのかかわりに関すること……思いやりの心
３．主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること……生命尊重
４．主として集団や社会とのかかわりに関すること……規範意識、社会連帯

ところで今、社会および学校で課題になっていることに、情報モラルがある。多くの家庭に普及したインターネットや子供たちの所有が増えている携帯電話は便利な反面、利用法によってはいじめや犯罪にかかわる機器となる。いじめや犯罪を予防し、適切に利用させていくためには、情報モラルを子供たちに身に付けさせていくことが重要である。この情報モラルの指導に当たっては、道徳の時間の規範意識・思いやりの心の内容項目、総合的な学習の時間、特別活動、社会科・技術科等で関連付けながら行っていくことが効果的と考える。

「『豊かな心』とは」という二重線の中について、一ノ瀬先生からとくに検討してほしいというお話があった。

アドバイザー

道徳教育の目標の中の「豊かな心を持ち」についての学習指導要領解説の記述が一つの参考になる。

もう一つは、この部会が設営された背景の本区の基本認識と整合性がとれていることがまず前提かなという気がする。

豊かな心についての解説をすべて書き込むことでなくて、私たちが検討してこういうところが非常に重要度の高いものとしてとらえているということでいいと思う。

中教審の「人間らしい豊かな心とは」というので、確か七つくらい項目が書いてある。そのことをベースにして、本区のということでいいのかなと思う。

委員

今ご指導いただいた解説の中の文言、そして本部会での整合性。このへんで少し確認するということで。

事務局

順序についてはどうか。道徳で示されている内容項目の順序に合わせることも考えられる

部長

順序に有意性があるかどうかはわからないが、答申の６ページの「（イ）心の教育の推進」の順番で書いてあるのは、「異学年の交流」で始まって、要は「社会生活を送る上で人間としてもつべき規範意識、自他の生命の尊重、自分への信頼感や自信などの自尊感情、他者への思いやり」。その順番でこれが書かれているのでは。

委員

最初、たしか四つのこと、自尊感情、思いやり、生命尊重でやっていた。それで社会連帯も必要だろうということで、その流れで書いた。

アドバイザー

もう一点。道徳の四つの内容のくくり方に基づいて書いているので、「人間の心というのは、さまざまなものとのかかわりを通してはぐくまれるのだ」ということを最初に書くほうがいい。そして、はぐくまれる豊かな心の中身は非常に広義で、とらえどころがない。文章には表しにくいというほうが、まだいい。そうでないと下の項目が浮いてしまう。

委員

③地域の資料の活用

心の教育を指導するに当たっては道徳の授業を中心に全教育活動を通して進める。その際、効果的な資料を用いて「豊かな心」をはぐくんでいく。資料としては、「心のノート」や道徳の副教材、映像、書物、自作の資料等いろいろ考えられるが、練馬区や東京都に関する資料や事例等を活用することで、さまざまな課題を身近に捉えられるようにしていきたい。

例えば、練馬区には『練馬区児童・生徒基礎調査報告書』（練馬区立総合教育センター）、『文集練馬の子ら』（練馬区小学校教育会国語教育研究部）、『すずしろ』（練馬区中学校教育研究会国語部）、『健やかに育てる』（練馬区教育委員会、練馬区立総合教育センター）、『わたしたちの練馬区・東京都』（練馬区教育委員会）、『私たちの練馬』（練馬区教育委員会）、『ねりまのかんきょう』（練馬区環境まちづくり事業本部）、「移動教室」、「練馬の歌」、「みどり 30」、「練馬子ども議会」、「中学校生徒海外派遣制度」といった資料や取組等がある。

また、東京都教育委員会では、『人権教育プログラム』、『東京都道徳教育郷土資料集』、『わが青春の記録―定時制・通信制高校生の生活体験』等を発行している。こうした身近な事柄から学ぶことは、必ずや子供の心を揺さぶってくれるに違いない。

アドバイザー

活動も入っているから、「地域資料等の活用」というタイトルのほうが誤解されない。要するに、文章化されたものの資料だけではなくて、取組というふうに最後結んでいる。

委員

④指導体制

現在、小学校、中学校はそれぞれ学級担任制、教科担任制で指導している。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期をどのようなかたちで指導していくのが最適なのかを考えていかなければならない。一案としては、学級担任制と教科担任制の中間に「一部教科担任制」（緩やかな教科担任制）を置くのか、教科等の関連も考えながら決定したい。

アドバイザー

この決定したい主体者はこの委員会ということだろうか。

委員

決定したいというのは該当校か。ただ、正直言って該当校だけでもできない。人事的なものがあるから、教育委員会も関係すると思う。モデルぐらいは、こういうようなかたちでとこちらで来年出せなくはない。そうすると決定ではない。

アドバイザー

「さらに検討を加えることにする」とか「しなければならない」とか、そういう表現のほうがいいと思う。ここで言い切ってしまうと、言質をとられることになる。

指導体制というわけだから、様々な人たちの参加、協力を得るというような意味合いも少し載せておいたほうがいい気がする。

要するに、チームティーチングの外部の講師を呼んでやる。これは非常に効果がある。実際に、過去にマラソンの選手だった方の話に生徒は夢中になる。そういう実践を何回か見たことがある。指導体制の中にそういう部分ものぞかせておく。

練馬区は特色ある教育活動で、その予算が各学校にいっている。表記として、そういうこともものぞかせるといい。

委員

（3）重視する指導項目

① 重視する指導項目とそれ以外に指導する内容

ア 規範意識

「心のノート」の中に会津藩士としての心構えを定めた「什の掟（じゅうのおきて）」が紹介されている。什の掟の最後は、「ならぬことはならぬものです」で締めくくられている。現在、日本人に最も欠けてきた道徳的価値が規範意識と考える。さまざまな人々が共に暮らす社会だからこそ、（気持ち）よい社会にしたい。その実現のために、この項目を第一にもってきた。社会人の一人として健全に生活していこうとするには、「人として、してはいけないこと

など社会生活を送る上で人間としてもつべきことがら」を自分自身が守っていかなければならない。法規を遵守する、集団でのきまりを守る、友達との約束を守るなどの規範意識やマナー・礼儀などを身に付けさせることで、（住み）よい社会の実現を図りたい。また、この項目では、個人がもつ権利とともに義務を果たす大切さを理解させ、社会の一員としてよりよい社会の創造に貢献しようとする意欲・態度を育てたい。

イ　生命尊重

子供が自らの命を絶つ、または人が人の命をいとも簡単に奪ってしまう、といった痛ましい事故・事件が相次いでいる。ゲーム社会の影響などがあってか、生命には、「偶然性・有限性・連続性」があることを理解できない向きがある。中には生命を軽んずる人さえいる。生命尊重とは、生命の尊さを感じ取る心、生きることに喜びを感じ、たくましく生きていこうとする心である。

自己の命を尊重することは、自己肯定感を身に付けることにつながる。他人の命を尊重することは、人権尊重の精神や思いやりの心の涵養に結び付く。さて、当然ながら命は人間だけに与えられたものではない。動物、植物等、全ての命が尊く、私たちの生命がこれら動植物によって支えられている。この事実を理解させ、同じ地球に住む生き物として共存共栄していくべき視点で指導したい。

ウ　自尊感情

自尊感情は、夢と自信を持って自分らしく生きていくための前向きな心である。そして、自尊感情は、子供が自信を持って成長するための糧である。自分への信頼感や自信などの自尊感情を身に付けた子供は生き生きとしている。反対に、他人と比べられ否定的に捉えられると、自己否定につながりかねない。どの子供にも活躍の場はある。学校行事、部活動、学習等…。しかし、自分に自信が持てず、元気のない子供が少なからずいる。『平成 19 年度　第 15 回練馬区児童・生徒基礎調査報告書』（練馬区立総合教育センター）によると、中学生の 70%前後が意欲を持って生活しているが、学年が上がるにつれこの数字が減っている。また、※無力群の児童・生徒では学校での学びを将来のために必要だと思っていない子供が男子 50%、女子 75%と高率である。

自尊感情をはぐくむためには、日常の学習や仕事をしっかりと行うことから始めさせたい。決意したことを粘り強くやり抜く強い意志は自信となり、自尊感情へと成長していく。中学を卒業するにあたり、「私はこの学校で頑張るんだ」という思いを持って進学していく子供。あるがままの自分を受け入れ、夢があり、自信を持って生きていこうとする、そんな子供をはぐくんでいきたい。

※「やる気を持って生活しているか」「頑張れば自分の夢をかなえられると思うか」の２つの問いにいずれも否定的な回答をしたグループを無力群とした。

エ　思いやりの心

思いやりの心で満ちあふれた優しく温かい社会は、住みよい社会である。しかし、このところ社会が殺伐としている。思いやりの心が欠けた自己中心的な行動が多い社会が我々が目指す社会であるはずがない。

困っている人が目に入ったら手を差し伸べる。明日枯れる花に水を遣る。思いやりの心というのは、そうしたことができる心をいう。

さて、思いやりの心は身近な人への思いから育てていきたい。友達と仲良く遊べる。他者へ進んで親切にできる。最終的に、自分が今あるのは多くの人々の善意や支えによってであり、そのことに感謝し、思いやりの心を行動面でも実践できる精神を持たせたい。幸いなことに、「江戸しぐさ」というよき伝統が東京にはある。これらよき伝統を古きものとして捉えるのではなく、現代にこそ必要な所作と考え、指導に活用したい。

オ　社会連帯

自分の生まれ育った地域へのよき思い出は、人生を豊かにしてくれる。子供たちは、練馬区に生まれ、練馬区に育ったことに対してどう考えているのだろうか。都市化の現象の中で郷土愛の希薄化が進んではいまいか。地域社会への帰属意識を持つ、郷土の文化を理解し郷土を愛する、その心がやがては国を愛し、国際的視野に立って世界の平和と人類の幸福に貢献できる人間に成長させる。集団生活を通し、集団における役割を自覚し、よりよい集団を作っていこうと努める思いをはぐくんでいきたい。そのためには、地域の人々の教育力を活用しながら学習を進めたり、ボランティア活動を充実させていく。

カ　重視する指導項目以外に指導する内容

上記にあげた５つの心以外にも多くのはぐくみたい心がある。それらをバランスよく身に付けさせることができれば、子供たちは豊かな人間として育っていくことができるに違いない。それは以下のようなものである。

１　主として自分自身に関すること　基本的な生活習慣、態度・節制、誠実・責任感、個性の伸長
２　主として他の人とのかかわりに関すること　礼儀、友情、異性理解
３　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること　自然愛護、畏敬の念、弱さの克服
４　主として集団や社会とのかかわりに関すること　正義、公正・公平、勤労と奉仕の精神、家族愛、愛校心、郷土愛、日本人としての自覚、国際理解、人間愛

アドバイザー

②豊かな心の内容、重点的に取り扱う４項目と同じ四つの分類の視点が出てきているので、分類整理の視点そのものが、何を意味しているかをこちらでは書いたらどうか。

例えば、１番は「よりよい自己の成長につながる」、「望ましい自分を形成するためにかかわる内容」というふうになっていた。

２番目は、「望ましい人間関係を育てる内容」、「主として他の人とのかかわりに関すること」。「主として」というのは、限定されていないということを意識している。

３番目は、人間存在そのものの根底を問う。

４番目が自分と集団や社会との関係というくくりになっている。その中で、道徳の場合は道徳的な資質。一般的な言い方をすれば、社会生活をしていく上で必要とされる人間としての資

質能力と言ったらいいか。そういう表現でやるというのも一つの手かなという気がする。同じのが二つ出てくるから、そういう工夫があると読みやすくなる。

自尊感情で調査結果から引いている箇所が誤解される可能性と少し意味がわからない所がある。ウの自尊感情の右側のページで。第 15 回練馬区児童・生徒基礎調査報告書によると、「中学生の 70%前後が意欲を持って生活しているが、学年が上がるにつれて数字が減っている」。数字が減っているのは何を意味しているかを書いたほうがいい。そうでなかったら同じ数値を比較して、こういうふうに低減しているとしないと、誤解される。

その次の表現も、「無力群の児童・生徒では学校での学びを将来のために必要だと思って……」。もう少しストレートにしたほうがわかりやすい。それから中身的に一つだけ気になった。その下のほうに「決意したことを粘り強くやり抜く強い意志は自信となり、自尊感情へと成長していく」。

つまり、強い意志を持つということは必要で欠くべからざることだが、もう一つ、人間はそういう心のかかわりを通して認められるということ。強い意志を持てばすぐ自尊感情ってできるのか。そうはいかない。そうでないと、頑固者をつくるだけになってしまう。

部長

最初の生越先生の指摘は、例えば中学１年では何%だったのが、中学２年では何%になる。具体的に書くということか。

アドバイザー

そちらのほうがわかりやすい。それか数字を捨象して冷徹に事実として書いて、「学習すること自体に意味を見いだせない子供がこんな割合でいる」といった表記のほうが、一般に読む人はわかる。

正論から言えば数値で示したほうが説得力があるもしれない。

それから、生命尊重の３行目が非常に気になる。「生命には『偶然性・有限性・連続性』があることを理解できない向きがある」。この表記は、その下の「生命の尊さを感じ取る心」。生命の尊さは説明が非常に難しい。偶然性・有限性・連続性、あるいは絶対性、尊厳性。そういったことが感じ取れないということ。我々がわかりやすくとらえる視点として、偶然性というのがある。精子が意図的、計画的に最初から人間の経過として卵子と結び付くわけではない。どの精子が結び付くかはわからない。

下の「生命尊重とは生命の尊さを感じ取る心」の尊さの後ろに（　）して、こういう説明の仕方があるというふうにするほうがまだ誤解が少ない。「理解できない向きがある」というと少し固い表現になるので、生命というのは説明不可能の世界だから感じ取ることが一番大事なのだと。理解したからといって生命を尊重するわけではない。知り得ることと行い得ることの違いというのは依然としてある。

それから、人間の力を超えたものに対する気持ち、神に対する気持ちというのが我々にはある。そうしたことを感じ取るのが一番指導の上では大事。理解はもちろん必要だが、その思い、強さがあるかないかということが、生き方に相当程度大きな影響を与える。

オウム真理教の理解力に優れた人たちが、命そのものを殺しても何とも思わない構造がなぜできたのかが今でも語られる。命の大切さを、理解でのレベルでとらえていると解説する宗教

学者もいるがそうではない。

部長

今のことで言えば、例えば「ゲーム社会の影響などあってか」というのを生かそうとしたら、「生命をリセットできるというふうに考える子供さえいる」という表現もできるかなと思う。もし、それを使いたいということであれば。場合によってはそこを削るという方法もあるかもしれない。

アドバイザー

人が死ぬということはものすごい悲しみがくる。これが一番説明しやすい。なんで悲しいのか。乳幼児期から児童、生徒と成長していくプロセスで、最初に出た体験をすることによって、人がいなくなるということはこんなに生きている人間を嘆き悲しませることなのだという実感が、体験が重なるごとに徐々に思いが強くなってくる。

そうすると、「むざむざ自分の命を自ら絶つというようなことをしてはいけないな」と。これは理屈だが、そういうふうに成長するのではないか。「こうだから自殺してはいけないよ」ということではないのだろうと。そこが難しい。

先生がおっしゃったリセットできるというのは、要するに理解の範疇でとらえている。そのレベルでしかとらえていないという逆説も成り立つ気がする。

委員

②教育課程上の位置付け

「小中一貫教育校推進委員会答申」では、心の教育に関し、「いじめや友人関係の悩み、規範意識の希薄化など、児童・生徒の心にかかわる状況にも課題がある。児童・生徒に社会のルールや常識、人間関係の大切さ、善悪判断などの規範意識を教え、豊かな心を育てていく」と述べている。「豊かな心」をはぐくんでいくためには、現代的な課題に対応した取組を重視していくことが求められる。

本部会では、それぞれの心の育成に関し、（最終的に）育てたい子供像および各期・各学年ごとに育てたい子供像（目標）を描いた。その上で、指導する内容を明確にし、目指す子供像に到達できるようなカリキュラムを作成することにした。

豊かな心の育成にあたっては、９年間で様々な心をバランスよく育てていくことが大切である。道徳の授業を中心に、全教育活動を通してはぐくんでいく。さらに、意図的・計画的に家庭・地域と連携していくことが重要である。８ページの指導プラン例は、「豊かな心」の育成を全教育活動で推進するとともに、家庭・地域と連携しながら実施していくカリキュラム例である。

アドバイザー

もとの文章は「目指す子供像に確実に到達できるカリキュラム」。ここの手書きは「到達できるような」。到達が少し気になる。心というのは形に現せないので、いわゆる教科でいう達成到達目標というよりは、方向性を示す目標。近づくとか、迫るとか。もっといい表現があれば、先生も子供自身もそういう方向に向けて努力するというニュアンスがほしい。到達という

と非常に論理的。

委員

（4）目指す子供像

① 目指す子供の像

・規範意識　法やきまりの意義を理解し、それらを守ることで住みよい社会を作ろうとする子供

・生命尊重　命の尊さを理解し、自他の生命を尊重する子供

・自尊感情　自分のよさに気付き、自信をもつことで自己決定力を身に付けた子供

・思いやりの心　他人の立場やよさ（個性）を理解し、だれに対しても思いやりの心をもった子供

・社会連帯　社会の一員としての役割を自覚するとともに、集団での一体感をもちながら、地域社会に貢献しようとする子供

部長

「目指す子供像」で「目指す子供の像」となっている。次は、各学習期で目指す子供の姿になっている。目指す子供像というとなんとなくわかるけれど、子供の像というとちょっと違う。

委員

では、「の」は必要ないということで。思いやりのクエスチョンは消していいということで。

② 各学習期における「目指す子供の姿」

ア　規範意識

Ⅰ期…約束やきまりが守れる子供

Ⅱ期…法やきまりを守り、自他の権利を大切にするとともに、義務を果たせる子供

Ⅲ期…法やきまりの意義を理解し、社会の秩序と規律を高めようとする子供

イ　生命尊重

Ⅰ期…自分が生きていることを実感し、生命あるすべてのものを大切にする子供

Ⅱ期…生命がかけがえのないものであることを理解し、自他の生命を大切にする子供

Ⅲ期…生命の尊さを理解し、自他の生命を尊重し、大切にする態度を身に付けた子供

ウ　自尊感情

Ⅰ期…他者への信頼関係を持ち、自分の居場所を見つけられる子供

Ⅱ期…自分のよさに気付き、目標をもって努力していこうとする子供

Ⅲ期…自分のよさを伸ばし、自己実現しようとする子供

エ　思いやりの心

Ⅰ期…体験活動を通じて相手のことを思いやり、親切にし、いたわり、励ますことができる子供

Ⅱ期…体験活動を通じて人の優しさを感じそれを素直に受け止め、今日の自分があるのは多くの人々によって支えられていることに気付ける子供

Ⅲ期…体験活動を通じて自分の大切さとともに他の人の大切さを認め、ともにかけがえのない人間であることを自覚できる子供

オ　社会連帯

Ⅰ期…①学校の人々を愛し、協力して楽しく活動できる子供、②集団における自他の役割を自覚し、よりよい集団作りの責任を果たす子供、③練馬区や郷土の伝統と文化を大切にするとともに、郷土を愛する心をもった子供

Ⅱ期…①人と人とのつながりの大切さを理解し、地域社会の一員として、社会の秩序を守り、尊重して生活できる子供、②多種多様な伝統や文化を大切にし、異文化理解に努め、日本人として世界の人々との親善に努める子供

Ⅲ期…①人々や地域社会とのつながりを尊重して、よりよい社会の実現と発展に努める子供、②日本人としての誇りをもって国家の発展に努め、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする子供

委員

思いやりの心のⅡ期で「今日の自分があるのは、多くの人々によって支えられているからだということ」にしないと、通じないような気がする。

アドバイザー

思いやりで言うと、末尾の「気付ける子供」、その下の「自覚できる子供」。Ⅰ期は「励ますことができる子供」。これもある意味では揃えることが必要かもしれない。ただ、ここでの売りはどの期にも体験活動というのが頭についている。つまり、孫引きをしているんじゃない。こういうことを強くしているという意味で、特色として出せるかと。

それからもう一点だけ、自尊感情のⅠ期は小学校の３、４年生くらいまでのイメージ。Ⅱ期、Ⅲ期と比べてみると、少しここはレベルアップしている表現。調査によれば、一番自尊感情の高い時期。自分を疑っていない、あるがままの自分を素直に認めている時期。だから、自尊感情が高い。少しこれは難しい表現だなという気がしている。Ⅰ期はⅡ期、Ⅲ期の逆に考えていくといいのかなと。

委員

あと社会連帯はもっとコンパクトにということだったと思うが。

アドバイザー

他の項目とも比較的バランスがいい。①をベースにして、一文というか他の項目と合わせたほうがいいのではないか。

委員

では、社会連帯に関しては①を中心にして１本化するように頑張る。そのほか、よろしいだ

ろうか。この最後のカリキュラム例のところは。

委員

これも今回の中に入っている。ご意見をいただいたところもあるので、とくに社会連帯とか生命尊重に関して。

委員

要はもっと合わせて書かなければと思い、つけられるものだけつけて渡した。

社会連帯は、例えばＩ期の最初に戻るけれども「学校の人々や、練馬区の郷土を愛し」とかいうふうに。三つに分けないで、まとめてやるといいのかなと思う。

委員

生命尊重のところにもちょっと直しの部分の言葉が。

委員

もし分割するのであれば、無理にだがこういうふうにする方法もある。全部は考えられなかったので、今回はとりあえず前のままでもいいかもしれない。

委員

この間の話のときには、あえて分けられないものに関してはそれでいいという意見が出ていた。無理矢理分ける必要はないということで考えてはどうか。

委員

社会連帯の「育てたい子供像」はこれで決まりだが、各期ごとと各学年ごとのをもう少し他と揃えるということ。

委員

あと、冊子をつくる上でのテクニック的なことなのかもしれないが、うちの部会では８ページ分量で最後の８ページはギュッと表だが、６ページ、７ページの「（４）の目指す子供像」は先ほど生越先生がおっしゃたが、８ページにすべてコピーライトされている。これは文字化しておかなければいけないのだろうか。

例えば割付の感じとか、そのへんもある程度の指定が許されるのであれば、６ページの（４）のところから「次のような表にまとめた」という頭文をつけることで、ほかのところの少しスペース的な問題も余裕ができる。７ページ、８ページでこの五つの表を２ページ割で割り付けていくと、一応今年の段階ではこういう方向性を持っているというかたちでまとめられる。

そうすると、分量が多くてもいいのかなと思う。やはり１枚でまとめると字も小さいし、非常に読みづらい。２ページで見開きで割り付けられたほうがかなりゆったりできるし、どうしてもという縛りがあるのだったら別だが。ないのであれば、「このように考えてカリキュラム例をつけた」みたいな頭文をつけて、表があったほうがスッキリするのではないだろうか。

事務局

ページの割付は検討させていただきたい。ただ、方向として私も見開きで広い表になったほうが見やすいかなと思う。見開きにする問題点は偶数、奇数がずれてしまうので、８、９ページというかたちで見開きにならないといけない。そこは最後の段階で調整させていただきたいと思う。

委員

そうすると、文字化してあるところが必要なのかどうかというのは？つまり、ダブっている。

事務局

少しほかの部会の原稿も確認しながら。でも、同じ情報になってしまうので、方向としてはダブる必要は私もないと思う。見開きで、この文章化したものが表の中、このままで開いて見られるほうがいいかなという方向で検討してみたいと思う。

委員

では、オの社会連帯、７ページを見ていただいてⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期。①をもとに一つの文章にということで声があがった。先ほど言っていたのは、学校の人々というふうに限定せず、学校や例えば練馬区とあったが、「学校や地域の人々を愛し」というふうにすれば少し③のところも含まれる。

委員

学校はどうするのか。

委員

「学校や地域の人々を愛し協力して楽しく活動し」だろうか。②の「集団における自他の役割を自覚し、責任を果たせる子供」。

アドバイザー

地域の人々うんぬんというのを含めれば、①のままでいいのでは。すべてを表すのは難しいから、ある意味では仮説でもある。Ⅰ期で言えば、①に先ほど先生がおっしゃった「学校や地域の人々を愛し、協力して楽しく」活動できるか、活動する子供か。

Ⅰ期、１年生から４年生の社会連帯というと、そのへんの表現だけでいいのでは。自分とは異なるいろいろな人たちとかかわって生きていくことが大事だというイメージが出ているから、役割うんぬんとなってくるとこれが欠けている、これは書いているという話になってくる。

委員

①をベースにするということで、「学校や地域の人々を愛し、協力して楽しく活動できる」とあったが「活動する」でよろしいか。

アドバイザー

どちらかというと、「できる」よりは「する」ほうがほかの内容のかかわりでいうといいと思う。自覚できるなら「できる」でいいと思うが、活動だから、活動するような心構えをもった子供ということで。

委員

Ⅱ期はほとんど①に二つ目を入れようとすると、ものすごく複雑な文章になってしまう。「尊重して」というのはかなり固いので、「人と人とのつながりの大切さを理解し、地域社会の一員として、社会の秩序を守り生活する子供」ということも考えられる。

アドバイザー

一番のキーワードは、人と人とのつながりというところだから、そこで寓意を込めて強調するということで、今の先生の表記でいいのでは。最終的にトータルで表記のブラッシュアップは必要だと思うが、議論して結論を得るというかたちではなかなかできないので、どなたか一人か二人で最後はお任せするということになると思う。

委員

Ⅱ期は、今は少したたき台で。

委員

ただ、ここで「社会の秩序」というのを、またあえて持ってくる。ただでさえ今削っているところで、秩序というのは規範意識にもきている。もちろん色々なところが関連付けてはくるだろうけれども、あえてここに入れる必要があるのかなと。

委員

「地域社会の一員として生活する子供」というふうにサッパリと持っていくか。ただ社会連帯をいろいろ調べていったら、社会の秩序というのはすごく関連が出てきてしまう。切るに切れなくなってしまって、どんどん増えていってしまったというのが正直な気持ちだ。先ほどの①を尊重するというところでいくと、そのようにしたほうが逆に②もまた含めていけると考えることもできる。

委員

もう一度言うと「人と人とのつながりの大切さを理解し、地域社会の一員として生活する子供」、ちょっとたたき台にしていただきたい。

Ⅲ期。「人々や地域社会とのつながりを尊重」ではなくて、例えば「大切にして、よりよい社会の実現と発展に貢献しようとする子供」というのはどうだろうか。

委員

Ⅱ期で「人と人とのつながり」というのがあって、Ⅲ期で「人々や地域社会とつながり」で、「地域社会」を除けば「人々のつながり」はここで重複するような気がするが。

委員

どちらかと言うと、Ⅱ期のときはその大切さを理解するというあたりを持ってきて、Ⅲ期では理解した上でさらにそれを大切にしていくというふうに、言葉としては変えてみたのだが。

委員

「よりよい社会の実現の発展に努める子供」というのは、私はいいと思う。Ⅰ期、Ⅱ期から発展して、Ⅲ期目はこうなる。その前の段階が、「実現の発展に努める子供にするためには、どういうことをやっていったらいいか」をそこに書けばいいと思う。久能先生は、地域社会とのつながりを尊重したいということでつくっていただいたと思う。

アドバイザー

たしかに、後段の「よりよい社会の実現と発展に努める子供」は、②のほうにたまたま出ているものを総称して、抽象的に言うとそういうことなんだろう。社会連帯だから、何かに努める。積極的に何かをするようなことを通してだと思う。

②は文章としてわかりやすい。このまま入れるという意味ではなくて、「日本人としての誇りを持って国家の発展に努力するんだ」ということを通して、「よりよい社会の実現」という文章の流れとしては非常にわかりやすい。①の前段が少し座りが悪い。「よりよい社会の実現と発展に努める」だから、何かをやらなくちゃいけない。

委員

社会連帯の前の中に、「地域社会の帰属意識を持つ」というのがある。

委員

帰属意識は、今のところだとⅡ期に入ってしまうが。

アドバイザー

こうしたらどうか。この下にある「誇りを持って国家の発展に努め」のフレーズを引用して、「地域社会の発展に努めるなど」。文章の構造を②に持ってきて、地域社会の連帯感があって、その連帯意識を持って地域社会の発展に努力するとか、努めるというニュアンスが出てくればどうかと。

委員

地域社会の一員として自覚を持たせるということか。「自覚を持って、よりよい社会の実現」。または「地域社会の一員としての誇りを持って、よりよい社会の実現と発展に努める子供」。

アドバイザー

自尊感情という言葉を使っているので、誇りという言葉は使いたい。

委員

次はやはり繰り返すか。「よりよい社会」ではなく「地域社会」で。

委員

「よりよい社会の発展と実現に努める子供」で。では、今出た文をたたき台にしてということで。

委員

では、あとはカリキュラム例の各期はこれで収まったということで。学年ごとの社会連帯の６、７、８、９学年について出してほしい。

事務局

内容の修正について見通しを立てたいと思う。22 日に印刷屋さんに入れる。21 日に、まず一稿を完成させたいので、もう１回一ノ瀬副校長先生から発信をしていただいて、各委員で赤を入れて戻すということが必要になってくるだろうか。可能ならば7日の週に一ノ瀬先生から発信していただき、14 日の週に戻して赤を入れてもらいたい。

委員

８日の朝に発信し、14 日には返してもらって、11 日の交換に入れてもらいたい。14 日に赤入れて返してもらって、私が 15、16 で、16 日に校長先生方にもう一度赤を入れて直したものをメールする。それで 18 日にはまたいただいて直して、栗原先生にはメールで送るということで。

事務局

表記の問題は事務局で統一をさせていただく。例えば「持つ」という漢字。それから不登校の記述については、本区の情報を出せるかどうか、出した方がよいかについて事務局で検討させていただく。

アドバイザー

カッコ付けて、区が出せたら都の数値だけ並べておくとか。そうしたら、ある程度は俯瞰できる。

では、私のほうから１点。この報告書の奥付が練馬区教育委員会なら、最終的には教育委員会が責任を持つから、文言の修正も内容の加えも教育委員会がすることを皆さんに了解してもらわないといけない。「あれだけ書いたのに、何だよ」ということになることもあり得ると、過去の経験から申し上げておく。

一貫性、整合性をとらなくてはいけないこともあるので、奥付を何にするかによって報告のものは変わってゆく。国のレベルになると、私の書いた痕跡すらなくなる。協力者と最終的には中の決裁を得ないといけないので、そういうところもあり得ることを委員の方々は理解しておいたほうがいいと、老婆心ながら思う。

あとは内容の整合性、ブラッシュアップ等、他の委員会とのかかわりもたぶんあると思う。そうしたところは、教育委員会指導課のほうにお任せするしかないと思う。

ただし、ここで検討した中身がなくなることはあり得ないはず。それは心配ないと思うが、

次年度以降、相当程度この中身が影響する。これは都合が悪いから変えようということは、なかなか今度は議論するのに難しい。そういう観点、別の角度からもたぶん検討されると思う。そんなことも視野に入れながら、今後皆さんのできる範囲で参画していくしかないと思う。

事務局

今後、一同に会することは今日で終了させていただきたいと思う。原稿の流れについては、随時委員の先生方には現状についてご報告させていただく。

そして、最後に生越先生からお話があったとおり、修正が加えられていく可能性がある。それについては、大幅な修正については事前に情報提供させていただき、またご意見をいただくこともあろうかと思う。ただ、最終的にどうしても意見が分かれてしまった場合には、大変申し訳ないが、教育委員会としての考えということでそちらを優先させていただくこともあろうかと思う。